

うみなり



令和4年度 六ヶ所村立第一中学校 学校だより



令和5年3月17日(金)発行 第23号 文責 藤川 俊彦

卒業生答辞!!～卒業生代表山田莉穂さん～

3年前、新しい制服に照れくささを感じながらも、私たちは期待に胸をふくらませ、この第一中学校に入学してきました。この日から私たちの中学校生活は始まりました。小学校との違いに戸惑い、受験を意識しながらの勉強に大変さを感じた



1年生の頃。何もわからず戸惑いながらも、先輩方や先生方に支えてもらいながら、私たちの持ち前の元気の良さで、少しずつ中学校生活に慣れていきました。

2年生になり、私たちは「先輩」と呼ばれるようになりました。中堅学年として、先輩方を支えていく立場であると同時に、後輩に手本を見せなければならないことの大変さを知りました。人間関係のいざこざに苦しんだり、学級がひとつにまとまり協力していくことの難しさを感じたりする日々。そんな私たちが大きく変わったのは修学旅行です。はじめは目の前の自分たちのことだけに夢中になり、私語や時間のことで指導を受けることもありましたが、次第にリーダーを中心に自分たちの力で行動できるようになりました。修学旅行を通して、ひとりひとりの行動が集団に与える影響の大きさや、リーダーとして責任をもつことの大切さを学び、個人としても、学級としても大きく成長することができたと思います。

そして今年度、新型コロナウイルスと向き合って3年目の中学校生活最後の年、最高学年として初めて迎えた運動会は、コロナ対策が当たり前になりながらも、これまで2年間の経験を生かして、全力で取り組みました。委員会活動や応援練習などを、限られた時間の中で考えなければならないこと、やらなければならないことが山積みで、自分たちの役割のことで精一杯でした。時には意見が食い違い、思いが伝わらないこともありましたが、自分たちが思い描いていたものがなかなか形にならないこともあり、雰囲気が悪くなる時もありました。しかし、うまくいかないことに焦りを感じながらも、私たちはリーダーを中心に、いろんな意見を出し合い、お互いの気持ちを考えながら助け合うことができるようになりました。日に日に活動の雰囲気が盛り上がり、チームがひとつになってきました。運動会当日は、赤組、白組とも、それぞれ熱のこもった戦いとなりました。3年間で多くの変更がありましたが、自分たちの手で作り上げた運動会を成功させることができたことは、私たちの自信となり、大きな達成感を味わうことができました。

そして文化祭、今年はスワニーでの開催となりました。委員会では、司会や会



場準備、照明などの仕事を分担しながら行いました。他の委員会と連携を取りながら、本番同様に練習を重ねました。各委員長を中心に、周りを見ながら活動する大切さを経験することができました。学級では、合唱とダンスの練習計画をみんなで立て、話し合いを重ねて練習をしました。みんなが最高に楽しく踊り切ったダンス。また、1、2年生と2年間の銅賞を覆し、やっとの思いで金賞を獲得した合唱コンクール。すべてが思い出になりました。一から自分たちの手で作り上げ、成功したときの感動が今でも忘れられません。

私たちにとって、一中で過ごした3年間は、自分たちの成長のために無くてはならないものだったと、今、改めて感じています。3年前は、お互いに任せ合っていたことも、今ではひとりひとりが責任をもってできるようになり、支え合いながら生活できる学級へと成長しました。ここまで成長することができたのは、今まで私たちのために力を貸して下さったたくさんの方々のおかげであると感謝しています。

在校生のみなさん、これまで私たちを支えてきてくれてありがとうございました。思うようにいかないことがあるかもしれませんが、何より楽しさを見つけながら、新しいことにどんどん挑戦して下さい。立ち止まらずに行動することによって、自分たちが成長できる機会がたくさん見えてくると思います。みなさんなら、よりよい一中を作り上げてくれると信じています。(答辞の一部を抜粋：全文をご覧になりたい方は、上記のQRコードを読み取ってご覧下さい)



送辞！！～本間万梨花さんから卒業生へ～

私たちが皆さんに出会ったのは、新入生説明会の時でした。不安でたまらない私たちに優しく中学校生活について教えてくださいました。まもなく始まる中学校生活がとても楽しみになったことをよく覚えています。

運動会では各組が優勝を目指して、一致団結する姿に、皆さんの熱い思いを感じました。

特に印象に残っているのは、応援合戦です。1・2年生に根気よく振付けを教えてくださいました。皆さんの私たちに真摯に向き合う様子から「絶対に優勝する」「絶対に運動会を成功させる」という強い意志がひしひしと伝わってきました。また、当日、みんなで円陣を組んだ時の先輩方の気迫に胸をうたれました。円陣を組んだ後、みんなの心がひとつになり、これまでの練習以上に、迫力ある応援合戦になったと思います。運動会が終わった後の感動は、今でも昨日のことに思い出されます。

一中祭では、合唱コンクールで歌われた「手紙～拝啓十五の君へ～」が一体感があって美しく、魂が揺さぶられるような素敵な合唱でした。歌詞に Keep on Believing とあるように、自分を、そして仲間を信じ続けたことで創りあげることができた合唱だと思います。また、委員会活動では私たち1・2年生を率先して引っ張り、わからないことを丁寧に教えてくださいました。そんなみなさんの姿に感化され、私たちも自分の仕事に責任をもって取り組むようになりました。

活動中、何が起きても臨機応変に対応する先輩方の姿がとても頼もしくありました。委員会同士で話し合ったり、協力したりして連携する様子は私たちに「絆」を感じさせました。お互いがお互いを信じ、背中を預けたからこそ、臨機応変に動くことができ、今年の一中祭が素晴らしいものになったのだと思います。

みなさんは常に、仲間や私たちのことを気にかけてながら、何事も一生懸命に取り組む、一中学生の手本となってくださいました。まだまだ皆さんの足元にも及びませんが、全校で力を合わせて、この第一中学校をさらに向上させていくことを約束します。卒業後、時にはくじけそうになることもあるかもしれませんが、そんな時は、かけがえのない仲間や、私たち後輩、そしてご指導いただいた先生方と培った自分たちの力を信じることで、困難を乗り越えられると思います。

最後になりますが、みなさんの益々のご活躍とご健康をお祈りし、在校生の感謝の気持ちをのせて、送辞とさせていただきます。(送辞の一部を抜粋：全文をご覧ください) りたい方は右記の QR コードを読み取ってご覧ください)



祝辞！！～岡田 PTA 会長から卒業生へ～

卒業生のみなさんは、この中学生のちょうど3年間、新型コロナウイルスの流行と時期が重なってしまい、通常の授業、体育祭、文化祭、部活動、修学旅行など、あらゆる学校活動が制限されましたが、その中でもできることを一生懸命取り組み、頑張りました。特に、昨年秋に行われた文化祭では、スワニーでみなさんの元気な合唱や

ダンスや演奏をあの立派な会場で直接見て、素晴らしい発表でみなさんそれぞれの成長を感じとても感動しました。これからも活動が制限されている中でも、コロナの逆境に負けず、強く成長して欲しいと思います。

さて、みなさんは、本日、これまでの小・中学校の9年間の義務教育を終えます。これから高校生になって、大人に向かって大きく飛躍するみなさんへ、私から、応援の言葉を贈りたいと思います。今年の学校の活動で、一中の約束事を改定しました。これまで、実は私自身も校則のような決まり事があるのを認識していませんでした。中身をみると、ずいぶん前に決められたような内容や、部分的に付け足したり修正された決まりもあったようで、実際には守られていないものや、守ることが難しいもの、理由が不明なものなどがありました。そこで、生徒、先生、親が参加し、それぞれの立場で意見を出し、話し合い、生徒が納得した上で守れる、新しい一中学生の約束事を作成することができました。私はこの取り組みは非常に素晴らしいと思います。なぜなら、このようにみんなが話し合っただけで物事を決めていく事は、私たちの社会ではとても重要な事であり、実際に国会をはじめ県議会、村議会などの政治の場はもとより、会社の取締役会などでも全く同じことが行われているからです。私たちが、よりよい生活を送っていくためには、自分の意見をしっかり持って、会議や話し合いの場に参加し発言し、納得するまで議論し、みんなで決めて、それを守る。これが民主主義です。一中の約束事の改定に携わり、みなさんはとても貴重な経験をしたと思いますし、今回の経験を活かし、自信を持って、成長して欲しいと思います。これから高校生になったら、日々の出来事や勉強や部活動なんでもいい、とにかく自分がどこまでやれるのか限界まで頑張ってみてください。一生懸命全力でチャレンジし、出した結果が例え報われなかったとしても、その経験は絶対、自分の人生を豊かにする糧になります。将来のこの国を担うみなさんには、そういった経験を繰り返し立派な大人になって欲しい。若いうちは多少の欠点や失敗があっても良いのです。仮に失敗したとしても私たち親や先生は、いつも、いつまでも、全力でみなさんを応援しています。期待しています。(祝辞の一部を抜粋：全文をご覧ください) りたい方は上記の QR コードを読み取ってご覧ください)



校長式辞！！～校長から卒業生へ～

さて、本日は中学校の卒業であるとともに、義務教育の卒業でもあります。36人のこのメンバーは多少の入れ替えはあったものの9年間、こども園時代を含めると10年以上一緒だった人も居るのではないのでしょうか。この偶然の出会い、一緒に学んだ友達や先生との繋がり、縁をぜひこれからも大切にしてほしいと思います。

ドイツの詩人であるシラーの言葉に『友情は喜びを2倍にし、悲しみを半分にする。』とあります。たとえ六ヶ所の地を離れたとしても、これからも心はつながり続け、何かあった時に共に喜び、共に悲しむ仲間であって下さい。

そして、今日から皆さんは、自分で進む先を選び、自分で歩き、自分で責任をもつこととなります。今年1年間、最上級生として見せてくれた、挨拶、笑顔、真剣な瞳、そしてリーダーシップ。爽やかで、眩しいほど輝かしく、たのもしき姿。どんな時もカッコイイ先輩の姿を後輩たちに示し続けてくれた皆さんならば、この後の生活を積極的に切り拓いていけると確信しています。

そんな旅立ちの日にあたり、皆さんにお話したいことがあります。人生のどこかでふと思い出す時があれば嬉しく思います。今まさに日本中が盛り上がっているWBC(ワールド・ベースボール・クラシック)ですが、二刀流で有名な大谷翔平選手の活躍に注目が集まっています。当初は「二刀流は体の負担が増し、ケガのリスクが心配されるので危険だ」「投打のどちらかに専念した方が良い成績を残せる」との見方が大半で、大谷選手も 教え支える側の栗山監督も冷やかな目で見られていたそうです。しかし、2人は二人三脚で心技体を極め、突き進んでいきます。二刀流は不可能ではないと信じ続けた2人の歩みは、否定的だった世間の見方を変え、冷笑(れいしょう)は背中を押す大声援に変わりました。

大谷選手は「最初は僕も二刀流をできるか分からなかった。でも自分がやりたいことに取り組むことが大切。結果的に無理でも無駄ではない」と話しています。大谷選手を見守る側の栗山監督は「周りの人が思う『当たり前』にとらわれず、どんな手を打つことが最善なのか、信念を持って考え続ける姿勢が大切」と語っています。この大谷選手と栗山監督の言葉や行動を、これからより大きな世界にはばたいて行く皆さんの胸に留めておいてほしいと思います。

自分がやりたいことを「最初から無理だと思わず、チャレンジする積極さを忘れず、我が道を切り拓く人であってほしい」皆さんには、その力が十分にあります。(式辞の一部を抜粋：全文をご覧ください) りたい方は上記の QR コードを読み取ってご覧ください)

